

## 書評「実戦仕掛学 問題解決につながるアイデアのつくり方」

宮野 貴幸

株式会社エフシーエス

実戦仕掛学  
問題解決につながる  
アイデアのつくり方  
松村 真宏 著



2016年に出版された「仕掛学－人の動かすアイデアのつくり方」は一度紹介をさせていただいたことがあります。2023年に新たに実践内容を加えたものが出版されました。前作は「つい行動してしまうきっかけになるもの」＝「仕掛け」を体系的な学問分野として提唱する内容でした。

本書ではその仕掛けを実際に行い、得られた知見や事例などを紹介している内容となっています。

本書を手にしたきっかけは、自身がリハビリテーションの専門職として、地域を中心に活動してきた中で、地域住民の健康・介護予防の視点に立った際に、人の行動をどのようにすれば、自ら行動を起こすことができるのかという点に興味を抱いていたのがきっかけとなります。様々な行動変容理論等もある中で、出会ったのが「仕掛学」でした。

「仕掛け」の例を一部紹介すると、ごみ箱の上にバスケットゴールがあることで、ごみを入れたくなり、いつの間にか部屋が綺麗になっている。という仕掛けがあります。「仕掛け」を作る際には、つい楽しくなるような気持ちで「そそる」ということが重要ということが述べられていました。また実際の「仕掛け」を作るために、満たすべき要件として「公平性（仕

掛けによって誰も不利益を被らないこと）」・「誘引性（ついしたくなる性質を備えていること）」・「目的の二重性（仕掛ける側と仕掛けられる側の目的が異なる）」が必要であると紹介されています。こういったことから、バスケットゴールを見るとごみを入れたくなる気持ち（仕掛けられる側）と部屋を綺麗にしてほしい（仕掛ける側）の遊び心が理解できるように思えます。

この他にもいくつか紹介されています。①イタリアの彫刻である「真実の口」を病院の玄関に設置したところ、口の中に手を入れるように誘因したことで、手指消毒をする人が何もない状況よりも大幅に増加したという報告もあります。このほかに②コロナ禍でポケットティッシュを配る際に、マジックハンドを使用して配ることでティッシュの配布率があがるといった事例もありました。また③男性トイレの便器に「的あて」があることで綺麗な状態でトイレが利用できるなど、数多くの「仕掛け」が作られ紹介されています。本書は成功事例だけでなく、失敗事例も紹介されているので、失敗から学び得られる内容も記されています。

人の行動とは、正論をいくら並べても心はなかなか動きませんし、無理に押しつければ反発されることも多いかと思います。私たちの日常の身の回りでは、何か「興味」を沸かせてくれるきっかけでもある「面白そう」や「ワクワクする」を感じさせるくれるヒントがあるように感じました。

本書では全45事例が示されており、仕掛けの内容も様々です。読んでいくうちに自身の日常でも気が付かないところで、いつの間にか仕掛けられていたことを感じられました。著者は、「人々が仕掛けについて言及しなくなったときには文化として定着する可能性がある」と述べられているように、小さなアイデアやユーモアが、気が付かないところで社会的仕掛けとして、大きな変化への扉にもなりうることを感じさせてくれる一冊となっています。

株式会社エフシーエス